信州読書会　YouTubeLive&ツイキャス読書会

課題図書　岡本かの子 『蔦の門』

信州読書会では、毎週、YouTubeLive とツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。
（募集要項はメルマガでお伝えします）
また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会　ツイキャス　http://twitcasting.tv/skypebookclub
YouTubeLive　https://www.youtube.com/channel/UCaJK5OLmeEYI97oBQigdcgw
『信州読書会』 メルマガ登録はこちらから　http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 https://note.com/sbookclub/n/ndcfa96fad284
『ツイキャス読書会』 音声のバックナンバーです。
https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf
（各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張ってあります。）

岡本かの子

『蔦の門』

第 272 回のツイキャス読書会の課題図書は、 岡本かの子の『蔦の門』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

青空文庫　 岡本かの子 『蔦の門』

朗読しました。

メルマガ読者　KAI さん

『蔦の門』 感想文 「無常と命」

「年たけて　また越ゆべしと　思ひきや　命なりけり　小夜の中山」西行法師

岡本かの子『蔦の門』の主題を一言であらわすなら、西行のこの一歌で十分かも知れない。

三十代の頃に山を越えて関東へ旅に出た西行は、年老いてからはもう同じような旅には出られないだろうと思っていた。だが七十を目前にして再び山を越えることができたことに、彼は命のありがたさを感じ、この歌を残した。

西行の歌の背後には、常に「無常」についての洞察がある。

この歌も、ただ「元気でよかった」と言いたいのではなく、「人はいずれ死ぬ存在」という危うい土台のもとに一日一日と積み重ねてきた命の妙、昨日には死んでいたかもしれず、明日には死ぬかもしれないその狭間にある運命、そうした中で日々脚下照顧の視座に立とうとする彼の人生観をあらわした歌なのだと考えられる。
※脚下照顧＝周囲や他人のことよりも自分の足元をよく見よという禅宗の警句

『蔦の門』において、まきとひろ子の関係を見た「私」の胸に、西行のこの歌の句が浮かぶ。一見、『蔦の門』のエピソードと命の無常とはあまり関係がなさそうである。だが西行の場合がそうであるように、私たちが「無常」を感じるのは単に変化し移ろいゆく様を目の当たりにするときではなく、「変化」の中に淡い繋がりや儚い継続を見出す時ではないだろうか。
まきとひろ子とは、門に繁った蔦をきっかけとして出会い、友好的ではない関係として結ばれ、時間と共に互いに変化しつつもその不思議な関係は続き、そして母子ともまた違った結びつきを保って今に至る。人は変わるし結びつきなんて儚いもの、ましてやどちらが先に死ぬやも分からぬ世、そのような無常の中の現在に、強く優しく光るふたつの命の輝きを「私」は眼前にしたのだ。

ところで、西行は若いころの自分と老いた自分とを比べていた。まきは初めから老婢として登場し、若いころの様子は分からない。その代わりとしてひろ子が出てくるとも考えられるだろう。さて、まきの若いころとはどのようであったのか。主題は別の主題を生む。だが長くなりそうなので、今回はここまでとしよう。

（おわり）

メルマガ読者　TOTO さん

『蔦の門』 岡本かの子　感想文

小さい潜門（くぐり）から、不自由ながら出入りするほど、家族で大事にしている「蔦」がやがて老婢とひろ子の「縁」を結ぶのである。

作家が書き物をしている机のある窓から聞こえて来る老婢の声。
その雰囲気や態度から、まきの内面の思いまで想像し気遣うこの女主人の細やかな優しさが胸を打った。

「家族と同伴して」出かける時、誰かが支度が遅くて「苛立つ気持ちをこの葉の茂りに刺しこんで」という表現がとても思い当たり、この作家を女性として身近に感じた。

来客に待ちくたびれて、洗面台の汚れを磨き始めるようなもので、女性の気持ちがとても良く表現されていて、味わい深い文章であった。

孤独で「エゴの殻をつけている」老年の女の寂しさは、愛でる存在を見つけてもなかなか素直にはなれないのであろう。

そこでこの女主人の投げかける言行が好ましい。
「蔦の芽でも可愛がっておやりよ」（P.149）
「ひろ子も蔦をむしらなくなったしひいきにしておやり」（P.155）
と、彼女のプライドを傷つけないように肩を押してあげる真の優しさは、岡本かの子様の人間性の深さであると、とても感じ入ってしまった。

もし、まきがこの家に来ていなかったら、母のような愛をひろ子に向けることもなかったであろうと思うと、つくづく「縁」を感じてしまう。

ひろ子がお茶を出さないことの訳を伝え囁いた後の老婢が、主人にも気づかず通り過ぎてしまう程思い入っていた姿がとても印象的だった。すでに親子のような情に入ろうとしている。

「孤独は孤独と牽き合うと同時に、孤独と孤独は、もはや孤独と孤独とでなくなって来た」（P.158）

その後ひろ子の進路を心配し、先行き明るい方向に決めて行く主体性と毅然としたまきの態度からは、「身寄りと悉く（ことごとく）仲違いした」ということへの想像が薄らいで行った。

余程の事情があったのではないかと、身寄りの者達の方に問題があったのではないかと思ったが、今、愛を注げる存在を見つけた老婢が、素直な心でひろ子に接することが出来るような心に変化したと考えた方が良さそうだ。
老婢は、ちゃんと歳を重ねて行かれる地盤をつくれたのだから。

「蔦の門」がなかったら、それぞれにその歳にふさわしい人間の穏やかな成長もなかったであろう。

（引用はじめ）

「次の家の探し方に門に蔦のある家を私たちは黙契（もっけい）のうちに条件に入れて探していたのかもしれない。
そう思うと、蔦なき門の家に住んでいた時の家の出入りを憶い返し、丁度女が額の真廂（まびさし）をむきつけに電燈の光で射向けられる用な寂しくも気うとい感じがした。そして、従来の経験に依ると、そういう家には永く住みつかなかったようである」（P.147）

（引用おわり）

暗黙のうちに家族の意志が一致してしまう、この「蔦」への憶いはどこから来るのだろうか。

以前転居を考えて、土地を探しあぐねた。条件などを加味したのでなかなか見つからない。その後妥協して散々見て歩くのだが、結局、元からいた土地に引き戻され、結果それが一番良好な結果を導き出し、現在無事暮らしている。
ずっと後で考えてみると、見えない何かに無意識に従っていたのではないかと、この結果をとても不思議に感じたことがあった。

「蔦の門」に引き寄せられるように。

それもこれも、ラストの西行の歌のように、命あればこそなのであろう。

（おわり）

メルマガ読者　エヴァタさん

生きてこそ

まづはじめに「蔦」で思い出したのは阪神甲子園球場、それからペギー葉山の「蔦の絡まるチャペル」で始まる「学生時代」という歌です。蔦の絡まる建築物は煉瓦の門や西洋建築のお屋敷、チャペルなどがお似合いで、蔦の絡まる伊勢神宮とか比叡山延暦寺なんてのはイメージしにくい気がします。

さて、本作中に出てきた新古今和歌集の西行の歌、「年たけて　また越ゆべしと思ひきや　命なりけり小夜の中山　」を恥ずかしながらネットで検索しました

以前の自分ならこの歳まで生きて小夜の中山を越えるなんてできないと思ったろうけど、今こうして山を越える旅ができているのは生きていられるからなんだよなぁ、なんて意味らしいですね。
私は 40 歳を越えたばかり。自分と年の近い友人で先にこの世から離れていった人たちがいる、自分と同年代、またはもっと若い方で新型コロナウイルス感染症やら不慮の事故や病気で亡くなった人がいるのになぜ自分が今この感想文を書いていられるのか？　3 人の子供の父親になれたのか？　何かの力で生かされてるからなのか、自分の意志でなのか、ただ運がいいから死なずにいるだけなのかわかりませんが、兎に角生きているからなのだかぁ、とつくづく感じます。

（引用はじめ）

まきも老いて草木の芽に対する愛は、所詮、人の子に対する愛にしかずといふやうな悟りでも得たのであらうか。
（青空文庫版 『蔦の門』 より）
（引用おわり）

かの子先生の「仏教人生読本」によれば、仏教における悟りにも種々あり、悟りは一度だけ派もあれば、何度でも悟れる派もあるし、法然・親鸞、日蓮のように悟りよりも信仰が大事だよという宗派もあるようです。

（引用はじめ）

それで、人々の好みに従っていずれの道を選ぶとも自由ですが、大体の上から言いますと、すでに私たちが宇宙生命の一つの現れであり、その自覚に立ち得る素質が私たちの精神肉体の中に、生れながらに封じ込められてある。そしてその種子は折に触れ、時に乗じて天地からも哺み育てられ、自らも発芽成長しようと努めている。この原理に立たない大乗仏教はないのであります。それから私たち現実上の日常生活が、いちいちこの上もない修業であると説かない大乗仏教もないのであります。
故に、この生命弘通の大本を信じ、それからこの世の生活の道場の中で、現実を相手に、実地のさとりを開いて行く。実地のさとりとは、私たちが宇宙の生命の働きのごとく、何物にも自由に応じられ、何事にもみごとに処理して行ける完全無欠の人格者になることを目指して刻々に経験を積んで行くことであります。誠に意義のある楽しい信行（信仰と修業）であります。　　（青空文庫版 『仏教人生読本　悟り』 より）

（引用おわり）

引用が長くなり申し訳ありません。そして引用しながら理解しきれておりません。私ゃ完全無欠など最初から目指さない私ですが日常生活が信仰であり修行であり、意義ある楽しいものであるよう生きているうちは生きていたいと思います。以上

（おわり）

メルマガ読者　さくらさん

『蔦の門』 感想文

蔦が絡まるお家はお金持ちだという勝手なイメージを持っていて少し憧れもあるのでどんな人達が住む家なのかな？と思いながら読みました。

蔦が絡まっていたら綺麗な感じもするけど下手するとお化け屋敷みたいな不気味な感じもしてきて、ステキだなと思うような感じは意外に難しいのかなと思いました。

老婢のまきとひろ子との関係が微笑ましい感じもしましたが、どちらも自分を持っている強い女性なのかなと思いました。
手に職を持っていると将来役に立ってすごく良いと思うけど、私はお茶屋さんはステキだなと思ったので、お茶屋さんを続けていけばいいのになと思いました。
もしかしたらお店がうまく行ってなくて、続けられないという理由があったかもしれないけど……。

文章がとても良くて何度も読みたいと思う作品だなと思いましたがとくに好きなところは

（引用はじめ）

緑のゴブラン織のような蔦の茂みを背景にして脊と腰で二箇所に曲がっている長身をやおら伸ばし、箒を支えに背景を見返える老女の姿は、夏の朝靄の中に象牙彫りのように潤んで白く冴えた。（新潮文庫 P.159～160）

（引用おわり）

少し幻想的で綺麗な感じがして、年齢を重ねても変わらずそこに居るまきが幸せそうな感じがして良いなと思いました。

（おわり）

メルマガ読者　千歳飴さん

老婢のまきとフローレンス・ナイチンゲールの切々とした訴え

並行して読んでいる『カラマーゾフの兄弟』に、誰かの娘でも妻でもない、グルーシェニカという女が出てくる。
実家と断絶し、かなりご老体の商人の囲われ者になるが、如才無い彼女は資金を自分で増やす。
やがて元恋人への恨みがましい気持ちは憐憫のようになり、再会した時には関心を失っている。
カテリーナみたいな、彼女を見下そうとする人に恐怖心を持つこともない。
それはなぜか。白状すると、お金を稼いでいるからだ。

人を自由にするのは、ある程度の収入であると、老婢のまきもナイチンゲールも知っていた。

（引用はじめ）

ボランティアによる救護団体の常時組織の設立には真っ向から反対していた。これはマザー・テレサと同様、「構成員の自己犠牲のみに頼る援助活動は決して長続きしない」ということを見抜いていたためである。この考えは「犠牲なき献身こそ真の奉仕」という有名な言葉にも表れている。そして「構成員の奉仕の精神にも頼るが、経済的援助なしにはそれも無力である」という考え方があったからだといわれている。（フローレンス・ナイチンゲールの Wikipedia より）

（引用おわり）

老婢のまきはバツ 2 で、蔦の門を持つお屋敷で住み込みの奉公をしている。

まきは、ガキ大将ひろ子が、養父母の元で肩身の狭い思いをしているのを知って、ひろ子をいたわるようになり、2 人の間に愛情のような結びつきが育っていった。

（引用はじめ）

少し大きくなったひろ子から、家を出て女給にでもと相談をかけられたのを留めたのも老婢のまきであったし、それかと言って、家にいて伯母夫婦の養女になり、みすみす一生を夫婦の自由になってしまうのを止めさしたのもまきであった。（新潮文庫 P.158）

また自分の体験から、貧しい女はぜひ腕に一人前の専門的職業の技倆を持っていなければ結婚するにしろ、独身にしろ、不幸であることを諄々と諭して、ひろ子に看護婦になることを勧めた。（新潮文庫 P.159）

（引用おわり）

まきは、何億千万ルーブル積まれても自由を売らずに生きる道をひろ子に諭した。

特に看護師になることを、まきはひろ子に強く勧めた。まきは離婚し、実家とも断絶し収入が無かった。下女や女給のような仕事を、ひろ子にはさせたくなかった。そのような仕事は、奴隷のように媚びへつらわなくてはならない時もあるし、あえてそうしないのは危険すぎる。

そのうち、自尊心は低くなり自己嫌悪に侵食され心も体も滅んで行くような気持ちになるだろう。

看護師として収入を得たひろ子は、お世辞を言ってへつらい、魂が汚れるような思いをしなくて済むだけでなく、きっとあらゆる事柄じたい自由に考えられるようになる。

（おわり）

メルマガ読者　hoyo さん

「あいつは俺と、同じ眼をしている……」

　いたずらばかりするひろ子も、ガミガミロうるさいまきも、こころの内に孤独を飼っていて、それらが満たされない寂しさから、それらの問題行動を起こしてしまう。

　孤独感というものに対して、周囲が出来ることは僅かだ。

　何故なら周囲の人たちがいる時点で、彼女らは自身が思っているより孤独では無いからである。だけど、ふとしたことで思い起こされてしまうのだろう。自身は孤独だと。

　その気持ちが孤独感、孤立感となって彼女らを苦しめる。

　その内面的な問題を解決するには、もう一つの孤独な魂を必要であった。それらの魂が惹かれ合って、孤独ではないと思えるなら良いことだと思う。

　思えば、蔦にいたずらしたのも孤独感によるものなら、ガミガミさわいでひろ子に印象付けしたのも孤独感によるものと言えなくもない。

　そうやって蔦が絡み合っていくように、人間同士が絡み合って生きている。我々は孤独じゃあない。

　ひろ子も看護婦となり、まきもガミガミ婆さんは廃業して子どもに好きなだけ蔦を毟らせるように変わっていった。

　最期の日中戦争への出征は一体何なのだろう？　どうしても気になってしまった。

　新潮文庫版では、この部分は削除されているそうだ。この小説が初出のときは日中戦争の最中であったため、時事ネタとして出征のことが描かれているのだろうか？

　あきらかに取って付けた戦争の描写は、作者が本来描きたかったものではなく、編集などの第三者による指示ではないかと感じた。

「命なりけり小夜の中山---」生きていればこそ、再び小夜の中山を超えることが出来た。そういう意味があるそうだ。

　その描写のあとの出征は、不幸な結末を暗示させている。
　やはり出征の描写は蛇足に感じた。

　（おわり）

メルマガ読者　八王子ひげだるまさん

「現代の問題のほとんどは、速成された立場や思想が横行していることである」

（引用はじめ）

「蔦の茂葉の真盛りの時分に北支事変が始まつて、それが金朱のいろに彩られるころますます皇軍の戦勝は報じ越される。
もう立派に一人前になつてゐたひろ子は、日常の訓練が役立つて、まるで隣へ招ばれるやうに、あつさり「では、をばさん行つて来るわ」とまきに言つて征地の任務に赴いた。」　（岡本かの子「蔦の門」 青空文庫）

（引用おわり）

私が戦前の小説を読むのは、
祖母が生前に「戦前はいい時代だった」と一度だけ言ったからであり、
「回天」の乗組員であった祖父の名に懸けて反戦の立場を醸成する為である。

私の住む町には民営の戦争関連図書館が有り、
6000 冊の蔵書と史料が収められている。
寄贈された本の中で日本の戦争に直接関連しないものが古本として出される。
私はそこでソルジェニーツィンの「収容所群島」等を買うので、
相当詳しい人と思われているらしく、
職員の方から「新しく寄贈された戦争関連の写真や手記を見て頂けませんか」
と言われる時がある。
戦前の小説をたくさん読んで一々調べていれば、
写真の背景や、手記の内容についてある程度解る場合がある。

実際に従軍した軍人の方が書いたものは、
良かれ悪しかれ強烈なフィルターがかかっている場合もある。
空襲でどういう生活が無くなったのか、
知らずに反戦を唱えるのは非常に不自然なことだ。

作家の力量で創造した小説の登場人物とは、
実際の人間を抽象化し濾過し、再び蘇生させたものであり、
架空ではあってもファンタジーではない。

岡本かの子が小説を書いたのは昭和 11 年からの数年間であり、
それまでの歌人としての活動、大乗仏教の研究も小説として結実した。
昭和 14 年 2 月 18 日に岡本かの子は亡くなった。
5 月にノモンハン事件が起こり、9 月に第二次世界大戦が始まった。
それからの戦争において、

作戦の巧拙によって敗戦を回避出来たのではないかという意見もあるが、
それは小手先の問題で、
日本は今も近代を理解しようとはしないから総合力で劣っている。

（おわり）

メルマガ読者　nakano さん

『蔦の門』 読書感想

蔦の象徴は何か考えてみた。
青々と茂り、全てを覆い尽くす勢いは生命力を表し、人間の些細な営みで作られた建物は安普請であろうが豪奢な建築であろうがこの緑の侵略者にたやすく覆われる。
しかし、手入れをし、うまく付き合えば安らぎを与え、強い日差し、冬の寒さから守ってくれる。
緑の母親のようなものか。

その蔦の葉への悪戯が縁で、まきとひろ子は出会い、やがて親子のような付き合いをする。
まるで葉は、両親を亡くしたひろ子と二度の離縁で孤独な老女まきのそれぞれの心の傷を覆ってくれる絆創膏でもあるようだ。
まきは母性に目覚めて、ひろ子はそれをまきに求めたのだろう。

気付いたのだが、蔦を許容し這わせ、老婢まきの面倒を見る度量が作者にはある。
作者も多分に母性に溢れた性格であろうと思える。

作者とまきの母性的な愛情の連鎖で少女は一人前の経済的、社会的に自立した女性になることができたのがこの物語りだろう。

つまり蔦は母性の象徴なのだ。

昭和 25 年発刊の新潮社版には最後、ひろ子が従軍看護士として戦場に赴くくだりが消されているのがとても気になる。
不幸な結末を予感させる文を著者の遺志で消したのか？
戦後の黒塗り教科書のように、軍に協力的だったのかとも思われる文章を自主的に削除したのか？
いずれにせよ、腑に落ちない。

（おわり）

メルマガ読者　玉井さん

かの子珍談三題

本書『蔦の門』読後の乃公、深更の御酒に次ぐ御酒の果てに、確実、精細、広汎な知識に根差さぬ愚にもつかぬ料簡三題、以下に捻出せり。

▼珍談　一:
老婢まきとひろ子の孤独が蔦を通して解消されていく展開は清々しい。これは三島由紀夫『潮騒』も同様、直球の筋にも関わらずそれでいて陳腐に堕ちない理由はやはりある様に思う。著者・岡本かの子の場合、それは詩性とでもいおうか、文章の主成分に鋭敏な感性が織り込まれている印象を受ける。例えば以下三点、一見して不明瞭の感があるがなぜか惹きこまれる文章である。

<<焦立(いらだ)つ気持ちをこの葉の茂りに刺し込んで、強ひて蔦の門の偶然に就いて考へてみることもある。>>
<<蔦なき門の家に住んでゐたときの家の出入りを憶(おも)ひ返し、丁度女が額の真廂(まびさし)をむきつけに電燈の光で射向けられるやうな寂しくも気(け)うとい感じがした。>>
<<緑のゴブラン織のやうな蔦の茂みを背景にして背と腰で二箇所に曲つてゐる長身をやをら伸ばし、箒を支へに背景を見返へる老女の姿は、夏の朝靄(あさもや)の中に象牙彫(ぞうげぼり)のやうに潤んで白く冴えた。>>

▼珍談　二:
あらゆる文章の成り立ちは、まず自己の内に生じる意志および感情に端を発してそれを言語化の上で文章に書きあらわすといった段階を踏む。上記三点の引用についても、心象→言語→文章という同様のプロセスを経て作成されたには違いないが、岡本かの子の場合、感受性を言語に移す工程(心象→言語への変換)が非常に洗練されている様に思う。だから彼女の文章には作為の感があまり無く、物語に知らず知らず惹きこまれていくのかもしれない。

▼珍談　三:
私事恐縮だが、以前の私は日本文学をほぼ読まなかった。難解な表記に対し大いに戸惑うからである。しかし、かつて受験した大学入試において、幸田文という作家の小説が出題されたことでその戸惑いは一新された。やはり非常に難解な文章の集合体ではあったものの、不思議なことに物語に惹きこまれたのである(試験という事もあり集中していたせいか)。私はこの体験を通して、著者ならではの感性を「分かりにくい」と切り捨てるのではなくそこを吟味すればするほど面白さへと移行する、ということを見出した。以来、私は日本の小説を読み始め、女流作家といえば幸田文とばかり思っていた。が、読書会を通じて岡本かの子の作品を読むにつけ彼女の感性、表現力は幸田文に引けを取らない並み外れた人物だということに気付かされたのである。

といったことを考えながら、でもやっぱり「コジコジ」が一番おもしろいなあと思った。

以上

（おわり）

信州読書会　主宰　宮澤さん

人間の恐るべき業が「蔦」なのではないか？

　青空文庫版で朗読したところ、新潮文庫版にはない最終部分が追加されていて、録音しながら、そのまま読み上げて良いものか迷った。

（引用はじめ）

　蔦の茂葉の真盛りの時分に北支事変が始まつて、それが金朱のいろに彩（いろど）られるころます／＼皇軍の戦勝は報じ越される。
　もう立派に一人前になつてゐたひろ子は、日常の訓練が役立つて、まるで隣へ招ばれるやうに、あつさり「では、をばさん行つて来るわ」とまきに言つて征地の任務に赴いた。
　「たいしたものだ」まきは首を振つて感じてゐた。　（青空文庫版 『蔦の門』 最終部分）

（引用おわり）

　私の持っている新潮文庫の解説は亀井勝一郎のものである。岡本かの子の作品には、江戸情緒と文明開化の混じり合った独特の雰囲気がある、と彼はいう。蔦の門というのは、西欧趣味なのか、江戸情緒の一つなのか、私にはわからないが、蔦は教会を連想させるので、私には、西洋風に感じられる。西洋趣味と江戸情緒の混交が『蔦の門』なのだろう。

　江戸情緒は、関東大震災と東京大空襲で全滅したとある。谷崎は関東大震災後の東京に幻滅して上方に越した。私が、戦前から活躍していた志ん生や文楽といった噺家のネタを YouTube で聞いていて、感じ入るのは、失われた江戸情緒の名残があって、粋だからである。
　粋とは、「諦めと意気地と媚態」である、と九鬼周造は定義した。まきには、諦められないなにかがあって、同じ孤独の中にあるひろ子を励まし、彼女の自立のために、彼女の手に医療の専門技術をもたせた。

　女性が看護師になるのは、経済的自立を得るということで素晴らしいことだと思う。しかし女性の経済的自立さえも、超国家主義の中に包摂されて、大日本帝国の軍事戦略を支えるものになろうとは、意外である。経済的自立が軍国主義に組み込まれて、女性の自立という当初の志が踏みにじられていくを見るようで、私は、苦々しく感じた。

　ひろ子の従軍を「たいしたものだ」と感じ入ったまきの感慨を、私はどうしてもグロテスクに感じてしまう。この感慨には、隣組の監視体制や国防婦人会の銃後奉仕につながるような、超国家主義的ファナティシズムの響きがある。まきの素朴な庶民的善意が、国威発揚をつうじてファナティックな翼賛体制支持に変節し、その結果、彼女たちがこよなく愛した、蔦の門のある江戸情緒を、焼夷弾の火の海の中に滅ぼしてしまうという因果に、人間の業（ごう）の禍々しさを見た。

　最終部分のあるなしで、随分印象の変わる作品だと思う。最終部分があったほうが、人間の業が顕（あらわ）になって怖いと思った。この業＝現世の因果関係の絡み合いが、「蔦」が象徴しているとしたら、それを見越して、戦前に亡くなった岡本かの子の慧眼に、背筋が凍るような怖さを感じる作品である。
　（おわり）